

長編小説

愛の幻滅

田辺聖子



愛の幻滅

田辺聖子

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 愛の幻滅

昭和53年2月28日 初版1刷発行
昭和53年3月30日 4刷発行

著 者 た な べ せい 子
田 辺 聖 子
発 行 者 小 保 方 宇 三 郎
印 刷 者 小 林 清
東京 都 港 区 三 田 5-12-1
図 書 印 刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。 (図書印刷)

© Seiko Tanabe 1978

(分)0-0-93(製)92030(出)2271

Printed in Japan

目次

目の前の草	5
求ム「幸福」	35
ハイ・ミス時雨 しぐれ	64
藻 も の下 か の蟹 かに	87
孤独の襲撃	116
やわらかい唇	134
そしてまた朝	164
秋の麦わら帽子	199
いいえ、別に……	228

装帧／
滩本
唯人

愛の幻滅

田辺聖子

目の前の草

I

約束の、中山手の街角に立っていると、大阪のほうから見慣れた車がスーッときた。

オフ・ホワイトの、おとなしい目立たない国産車である。適当に古びていて、そこもいい。なつかしい感じ。

ドアをあけてくれて東野は開口一番、

「十時の約束やぞ」

と文句をいった。

「あれ、待ってたん？」

私、私のほうが先についたとばかり思ってた。

「あたりき。いま十時二十分です。なにいうとんねん、こんなところで駐車でけんさかい、このまわりグルグル回ってたんや。かなわんなあ」

「まあまあ、よろしやんか、これから気をつけてチョーダイ！」

「どっちのいうこと」

と揉めるのもたのしい。たのしすぎるから、ケンカになってしまうのだ。

快晴の、すてきな日曜だった。

まったく、阪神地方の、冬の快晴ほど美しいものはない。

あたたかで、風はない。時折り、風の冷たさを感じることもあるが、それは、あたたかい日ざしをより快適にする香辛料といったもの、肌においしい風の冷たさである。

空は、真つ蒼で、スモッグはなかった。

春さきの水蒸気や露はないので、遠くの連山の、巒ではつきりみえる。

それは、群青色に深みを帯びており、また、日があつると、濃青から紫に変化したりする。

あんまり空気が澄んでいるので、山頂の、テレビ塔とか、何だか、二、三本立っているもので、くつきり望まれる。

日曜なので、神戸の街には人も車も少ない。

要するに、この季節の好ましさは、

「透明やねんなあ……」

と私はうれしくなっていた。

「何？」

と東野は運転しながら、東名なんかでなくこれから入るのは「中国縦貫道」だと教えた。

「何も、そんなこと、いうてえへん」

と私はいい、東野に話をして、二人でゲラゲラ笑う。何を見てたのしい。

「弁当持ってきたか？」

と東野はいった。

「持ってきた！」

ちゃんと二人分、私は作ってきた。熱いお茶も、魔法^{ばん}饅^{まう}にはいつている。

「その、弁当は、ふつうのメシやろうねえ……」

と東野は心もとなさそうな声を出した。

「サンドイッチとか、そばずし、なんてもんではないでしような」

「もちろんよ、白いごはんをどっさり」

「よかった」

東野は、ずっと若いころ、若い女の子とピクニックにいつて、その子が「弁当持ってくるわ」といったのでいい気になってたら、ひろげたのはサンドイッチとそばずしだった。

いっぺんにがっかりして、

「涙、出てきた」

という。

東野はかなり大めしぐらいの男で、それも白いごはんが好きである。ごはんでも、ばらずしとか炊きこみごはんなどをきらう。

「昔の代用食、いう感じがぬけへんねんなあ。見るのもいや、や」

終戦後の、たべもののない時代に大きくなったので、混ぜごはんとか、お好み焼きとか、ふかしパン、雑炊、お粥^{かゆ}なんか見ると、たまらなくうんざりして、また、

「涙、出てくる」

そうである。

よく涙を出す人だ。

自分の、四十一という年齢^{とし}を考えると、

「涙、出てくる」

という。

「なんで？」

ときいたら、

「信じられへん。自分いうもん、別にあって、何かしらヨソの奴がトシとってる気イする。ひとごとみたい。自分が四十すぎた、なんてウソちゃうか思う」

「ハハア」

私も、三十になったらそんな気がするかもしれない。
いや、しかし、二十八のいまでもほんという東野と同じ感懐をもっている。

自分ではない、ヨソの人間が、トシをとっていく、それを自分がみつめている、そんな感じである。何ものにもしれぬ大いなる者から、

「お前は二十七になった、お前は二十八になった」

といちいち、連絡されて、

「そんなはずない！」

と、どうしても納得せず、苦情を申し立てている、それが私と、私の年齢との関係である。それが東野もそうだなんて。

「ねえ、東野サン、二十八のあたしが四十一の東野サンと同じことを考えてるなんて、あたし、ませてるのかなあ、かしこいのかなあ」

「なあに。人間のタイプが同じや、ということやな。べつに年とったからそれだけ賢うなる、というものではないね。人間の考えることって、若いころからあんまり変わるもんやない」

なんとなく、そんな話をし合って車を飛ばしてるときが、私にはこの上なしの幸福な気分である。私は鼻唄で車の窓から外を見ている。中国縦貫道は、もうずうっと

前、開通したばかりのころ、やはり東野に連れてきてもらったことがある。でも岡山までもゆかず、途中でＵターンした。大阪府から兵庫県の山の中を縫ってゆくので、

冬は積雪で、チェーンを巻かないと走れないことが多い。もっとも、途中で引っ返したのはそのためではなく、

一日のドライブの距離に限界があるからである。夜に入ってまで走ってられないので、適当にはしょって帰らないと、おたがい浮世の義理に差し支える。東野は家庭もちの男だから（むろん）やたら泊まるわけにいかない。私は、独り暮らしだといっても、明日の勤めがあるし、

とんでもない所から、出勤するわけにいかない。

「いっぺん、Ｕターンせずに、好きなだけ走って、日が昏れたらそこで泊まって、という、旅をつづけたいわねえ」

と、いつか私は、いったことがあった。

「村から村へ、町へはいったり、山を越えたり、山の中の温泉に泊まったり、ゆっくり走って、好きな所に車を駐めて、そして、朝、また車に乗って出発する、なんて、いいでしょうねえ」

私がうっとりいうと、

「うーん、ねえ……。まあしかし、こうやって半日くらいドライブでも、おもしろさは変わらへんと思うよ。」

質は同じやと思うよ」

と東野は淡々という。その声には、べつに私を説得しようという気もないし、私たちの仲の、むつかしい状況にたいして弁解する、という気配もない。私はときどき、そこに、彼のニヒルな一面をみる気がする。

しかし、それでもって東野が、私に冷たいというのではないだろう。私が、

「Uターンしない旅をつづけたいわねえ」

という気持ちの底も、すっかり、よく知りぬいており、だからといって、それをどうこういつてもしかたない、（私も、彼を困らせるつもりでいつてるのでないことは、彼も、よく知っている）何もかも見通していて、「Uターンしなくてもしても、面白さの質は同じだよ」というのだ。だから私は、淡々という彼のニヒルな一面に、かえって温かみを感じる。

「まあ、目の前の草だけ抜いてたらええねん」

と、これは彼の口ぐせである。人生というものは、彼にいわせると草ぼうぼうで、草むしりしなければ腰をおろすこともできない、それで人々はせっせと草むしりするのだが、この際、りちぎな人は、ともかく目に入るだけの草をみんな抜こうとして躍起になる、欲が出る、見栄もある、無我夢中になつて抜いてまわる、そのうち、

腰がいたくなったり、肩がくたぶれたりして、ガタがくる。

だが、東野は、

「めんどくさいから、目の前の自分のまわりだけ、草引きをする」

という主義だそう。

「そないせな、キリあれへん」

「そうね」

「あんまり、むつかしいこと考えんようにしてんねん、僕」

なんてにっこり、する。とてもいい笑顔だ。

そういう言い方で、私は東野にくどき落とされたのだから、考えると、都合のいい言葉だ。

たとえば私が、

「ねえ、日曜に車持って家を出て、東野サンのおくさんは、何も言いはれへんのですか？ 何ていうて出たの？ また、ゴルフっていったんですか？」

と聞いたら、

「うん、ゴルフいうて出た」

と東野はかくさないが、また私が、

「毎週、ゴルフで出て、よう怒りはれへんねえ」というと、

「まあ、よろしいがな。目の前の草だけ抜いたらええねん。何も、そのへん一めん抜くことあれへん」

なんて巧妙にいくるめられてしまう。すると私は、

「アハハハ……」

と笑ってしまつて、そんな気になるから便利な言葉なのだ。

中国縦貫道へはいって、しばらくは町なかだったけれど、吉川のあたりから、山の中の景色が、目ざめるように展開してきた。黄葉は散りかかっているが、まだ縮れて木にしがみついていて、物さびた、いい茶色に沈み、濃緑の木々のあいだを、まだらに染めあげていた。山あいの段々になった田圃に、刈りとられた稲の束が点々と綺麗につづいていて、思いがけない所にある池は、落ち葉に掩おほわれていた。

藁ぶきの農家がいくつも、山あいにある。と思うと、小さな集落は、そのまま、往還に沿つていつまでもつづく。また、山に入り、林や、田圃がつづくのだった。

そうして、それらの上に、拭ぬぐいあげたような冬の青空がひろがっていた。

「わ、きれいだ。あんな山の中へあるいていたら、いいでしょね」

私は、夢中になって、おでこを窓ガラスにくつつけ、

外のけしきを楽しんでいた。

「山の中で何すんねん、みつかったら叱られるよ」

東野は煙草を啞くえながら運転している。

「やあねえ……何で山の中でせんなんのん。せつかくのきれいな景色の中で」

「何の話ですか。僕は、柿か、木の実を、あんたが取るのんちがうか、思うていうてるねん。何を氣イ回しとんねん、いやらしい」

私が、ギューと東野の脇腹をつねったので、

「危ない！」

と東野はハンドルを切つて、口笛を吹いた。

「ああ、早よ、めし食いたいなあ」

なんて、がっしりした体つきの中年男が、少年みたい。

「かわいらしいお寺か、しずかな神社があればええのにね。そこでたべましょう」

「滝野へ出よう、田舎やから、走つてると、きつとええとこにぶつかるよ」

「あたし、調べてくればよかったな、どこか名所旧蹟」

「なあに。そんなところは観光バスがいつてる。村の鎮守さまみたいなトコのほうが、たのしいよ」

「破れたお堂の縁で、お弁当たべますか」

「お堂の中で、ついでにナニして」

「ナニって、何ですか」

「その、お掃除でもして」

「なんでわざわざ、何十キロも車とぼして、見知らぬ村の鎮守サンのお堂を掃除せな、あかんのん？」

ともかく、東野といると、いそいそして、たのしくなる。

ほんとに、観光バスが幾台も走ってゆく。もう、おひるになったので、バスの中の人々は、みな折詰の弁当をたべていた。あわただし旅のように思われた。

私は、東野の軀からだによりかかりたくなっている。彼の短い、剛い髪かみの毛をひっぱったりしてふざけたくなっている。

往きしなは、たのしい。まだあと少なくとも五、六時間、彼と一緒にいられると思うから。

帰りは、だんだん口重になっていくけれど、往きは極楽、帰りは地獄、でも、

「目の前の草だけ、抜いてたらいいい」

というコトバは、こういう時のためにあるのです。やつぱり東野サンはオトナだ。

「眉ちゃん、そこに財布あるから」

と彼がいうので、見ると、もう出口が近づいてきている。

「あ、あたし出す、すぐ出るから」

私は、ハイウェイの料金所で、女がお金を出し、男がそれを受けとって、右ひだりに、おじさんに渡してのが好きである。

そういうのが、夫婦みたいな感じがする。

私はべつに、結婚したいと思ってるのではないけれども、夫婦のかたちについても、氣をとられてるところがある。

女の荷物を、すぐ持ってやる男、とか。

ハイウェイの料金所で、女が、かわいらしい小さな赤いガマ口をあけて料金を出し、男に渡して、男がそれを払って、ごくふつうの光景が、いかにも夫婦らしいと思つて、うらやましいというのではないが、みとれるときがある。

独身女の感慨かもしれない。

でも、「目の前の草」だ、とりあえず。

「どっちへいこう。右か左か！」

と東野はたのしそうにいつて、

「いきあたりばつたりの旅、なんて、こんなオモロイこと、夫婦やったらできるかい、ほんまやで、眉ちゃん」

それも、私をなぐさめていうのではないな。

東野は、ホントウに、そう思つてゐたい。

「夫婦やない男女の仲ほど、楽しいもんないねんで。眉ちゃん」

2

滝野で高遠を捨てて、車はふらふらと（いかにも迷うてます、といわんばかりに）おぼつかなく走り出した。私も東野も、はじめての土地である。日の光がたっぷりたたえられ、溜められてあるというような、冬の野の景色である。まだ樹々の葉が落ちつくしていないので、蕭条とした感じはなく、ホッコリと暖かそうなあたりの景色だった。

「カンでは、こう、山側へいったほうがよさそうだな」

と東野は頃合いのところで山ふところへ通ずる道を折れた。

こんな田舎町にも団地があり、稲を刈りとられた田圃のつづきに、小さい病院があったりした。見知らぬ外国を走っているようで、珍しくていい。ただ、町を出はすれ、山や丘を走っても、鎮守さまのお社、というものはみえない。薄の野や雑木林だけ。

「あ、あ、きれいな林」

と私は車窓を見て叫んだが、それは墓地だった。墓石に坐つて弁当を拡げるわけにもいかないし、と東野は目もくれず、走り抜けてしまう。

そのうち、小さい村があらわれた。右手にこんもりした山があつて、おあつらえむきの神社である。古びた高い石段をあがるようになっていた。

「まあ、こんなところかな」

と東野はいつて、見てくる、と車を村の入口に停め、石段をあがつていった。

私は、お社よりも、小さい村をながめた。

どの家も眠つたように戸を閉め、庭先には赤や青の、びかびか光る車を置いていた。遠くから農婦が二、三人、重そうな布の袋をかついで、長靴をはき、もんべの恰好で歩いてきたが、村へはい入る小さな流れに架かった石の橋をわたつて、納屋のかげに見えなくなった。空気が澄んでいるため、彼女たちの話し声は、通りすぎてからもさやかにきこえた。

国道を車は走つてゆくが、あたりはしんとして物音もなかった。

東野が戻ってきた。機嫌がいい。

「ええお宮サンや。先にあがつていい。車どこかへ駐めとくから」

「弁当は持つていくから、置いとぎ」と東野はいうのだった。

外へ出ると、思ったより風は冷たい。

文化何年かの字が彫られた石の鳥居をくぐり、鬱蒼とした木々に掩われた石段をのぼってゆく。柏や椎の葉が散り敷き、椎の実がいっぱいこぼれていた。苔むした石段を、私はよく注意してあがった。

たかい山頂のてっぺんに、樹にかこまれたあかるい神社がある。木が風を防ぐせい、わりに暖かい。古びた建築だが、神々しいというよりは木造りのしたしみやすさを見せて、いくつかの建物が四、五棟、とびとびに建っている。

人はいない。

社務所もない。ここの神主さんは、きつとどこかと兼任しているのだらう。

社殿に本殿、神楽堂、絵馬堂というのか、みな、板の間はきれいに清掃されており、「土足厳禁」という立て札が立っている。

井戸もあった。

別天地のような一区劃である。

私は、財布から十円を出して、お賽銭箱に入れた。鈴

は錆びた音がする。

手を叩いて拝む恰好をしたが、何とってこんなときお祈りするものなのか、

（東野サンがいつまでも元気でいてくれますように）

というのが本当の気持ちである。私は、東野が私より年上なので、いつも彼がさきに死ぬことを心配している。毎日、心のどこかでそれを考えている。だけどそういう気持ちには、夫婦にはないんじゃないかしら、と思う。

だって夫婦なら、毎晩、夫が帰ってくるんだし、家のこととか、子供のこととか、幼稚園の運動会とか、ガス代高くつくとか、暖房費、親類の法事の話、相談すること、討論・検討・採決すべきビジネスがいっぱいあって、毎日、「夫（または妻）の命が一日でも長いように」と祈ったりしていられないだろうかである。家庭の運営ということはビジネスだろうから、そんなノンキなことやってられないのと違う？

よく、知らないけど。

東野は、自分の寿命をたったいま、十円分延ばしてもらったとも知らず、にこにこ、

「ええとこやろ」

と石段をあがってきた。

「ほんと、お社相がええわ。不気味な感じないもの」

私たちは日のあたるお堂へあがらせていただくことにした。東野は車からクッションまで持って来ている。

弁当のおかずは、たいして変わったものもないけれど、私は、戸外で食べるお弁当には、持論があるのだった。

高野豆腐とか、おでんの大根のような、汁けの多い、煮含めたものを持って来ておくと、おいしいのだった。

それに、卵焼きや、いわしの生煮、肉と蒟蒻の佃煮、小梅に、たくあんといったもの、だいたい、東野と私の好みも同じだったから、お弁当を作るのはたのしみなのだった。

「うまい」

東野は、ものをいう間も惜しそう。

日がかげると、とたんに寒くなるが、魔法壇の熱いお茶で、体をあたためて、ごはん粒を一粒ものこさず食べべた。折箱を片づけて、

「眉ちゃんの弁当、うまいよ」

東野は満足そうだった。

「どんな駅弁よりうまいなあ」

東野は、なまじな料亭の料理より、気の利いた駅弁のほうをおいしい、という男で、ときどき、ホテルへいくのに駅弁を二つ買っていったりする。

東野は、私のつくる弁当を、

「眉ちゃん弁当」

と命名するといった。私のお弁当がおいしいとすれば、それは私と東野と、二人でたべるのだと思って作る、その心はずみだが、得もいえぬ味わいになって籠められているからにちがいない。

もし、ホカの人に食べさせるのだったら、いかに「眉ちゃん弁当」でも、すこしは気の抜けたものになつてにちがいない。私は、人間の掌を通じて発現される愛情を、ちよつとばかり、信じている人間である。

第一、幕の内のお握り型を木枠で抜いても、ちっともおいしくない。見た目はそろってきれいだが、やっぱり掌に、水と塩をつけ、しっかりむすんだお握りは、人間のてのひらから絶妙の味わいが出るので、全然ちがう。ましてそれが、好きな人に食べさせるお握りであるとなれば、よけいである。

食べてから、私は、お宮の境内を、日向を拾って歩いた。建物の床に点々と、小さなけもの足跡があった。私には、猫なのか、犬なのか、それとも狐かイタチなのかわからない。でもそれも親しい感じ。

「夏は涼しいやろうなあ。昼寝にもってこいやな」

東野はバタバタと片づけている。

「もう帰るの？」

私は拝殿の前で、美容体操をしていた。

「こんな寒いところにゆっくり、居れるかい。時間、もつたいない、こちゃ、せいとんねン」

時間、時間、時間。私には一分一分が、耳もとで鳴りひびいて過ぎてゆく気がする。

ふもとにある便所もきれいで、蜘蛛の巣なんか、ない。清潔に、掃除のゆきとどいたお宮サンである。ただ、手洗所がないので、田圃の小川にかがんで、私は手を洗った。あぜには寒そうに、かじかんだ小菊がひとかたまり花をつけていて、水は澄んで冷たい。

「ああ、よかった。いきあたりばったりに、いい所にぶつかって！」

私は満足だった。東野は車の鼻面づらを向けかえ、

「神サンに、ショバ代払うてきたか？」

「十円、払った！」

「足らん、いうてはるワ」

「何も神サンの見ちゃいられないような事したわけじゃなし」

「そこは神サンやからお見通しです。邪心もない健康なビクニックか、はたまた、このあと、どこぞへいこう、とせいて時間気にしとるのか、ちゃーん、とわかつてはるのです」

東野は重々しくいい、私は、

「あは」

と笑ってしまう。

「あ。もうこんな時間。早うホテルへ入らんと時間あれへん」

といったが、東野は慎重運転なので、あんまりスピードは出さない。そうして、

「たのしいな、眉ちゃん」

いまはじめて発見したように、感動している。

「みてみ。こんなこと、時間がないさかい、たのしいねん。夫婦やないさかい面白いねん。余計なこと考えんと、目の前の草だけ、抜いてるさかい面白いねん」

「そうかな」

「当たり前です。我々がこの世の中でいちばんたのしんだるカップルかもしれへん。あんなあ——」

東野は高速道路へ車を乗り入れ、おじさんにカードをもらった。

「恋愛に三通りあってな、中風ちゆうふうと同じ。中風の発作のあとで、怒り中風と笑い中風と泣き中風がある、いうやろ。恋愛も、それといっしょやな」

「ふーん」

「僕らの笑うてるから笑い恋、とでもいうか。いつも